



No.

69



2022.10

総人・人環 広報

特集 新任の先生方より

〈開かれた音楽知〉の可能性.....	上田 泰史.....	2
「真面目な勉強」ではなく「誠実な学問」を.....	須藤 秀平.....	3
「古巣」に戻って.....	小林 哲也.....	4
馴染み深いものと、見知らぬ横顔と.....	津守 陽.....	5
着任のご挨拶.....	福谷 彬.....	6
水は方円の器に随う.....	高見 剛.....	7

故 那須耕介 教授 追悼

悔いにまみれた年長の後輩より.....	細見 和之.....	8
すべての法律は守れません！.....	酒井 敏.....	9
那須先生を偲ぶ.....	小畑 史子.....	10
那須さんのこと.....	佐野 亘.....	10
那須耕介先生を偲んで.....	見平 典.....	11
果たせなかった「那須デビュー」 ——2019年秋・「未来形」シンポの断想.....	倉石 一郎.....	12

新任の先生方より

〈開かれた音楽知〉の可能性

上田 泰史

(人間・環境学研究科 共生人間学専攻/
総合人間学部 人間科学系)



昨冬、関東から京都に移り住み、4月から人間共生学専攻人間社会論講座に所属しています。担当は西洋音楽研究とフランス語です。18歳まで金沢市で育ち、25歳まで上野の下町で暮らしながら東京藝術大学に通いました。

31歳までパリ第4大学に通い、博士課程を修了したのち、関東で約5年間ポストク生活を送っていました。私にとっては、これが初めての京都暮らしであり、大学への就職です。戸惑いも多い反面、同僚の先生方や職員の方々のサポートに恵まれ、新しい環境下での研究や授業に精力的に取り組むことができている。この場を借りて、心より感謝を申し上げます。

いわゆる「音大」と長らく関わってきた私にとって、総合大学で音楽研究・教育に貢献できることはとても大きな喜びです。この20年余り、音楽学教員のポストは減少傾向にあります。背景には、少子化に伴う大学のカリキュラム再編や予算の縮小、教職課程への対応さえできれば事足りるという実務的な発想など、さまざまな要因があるでしょう。かつてプラトンもアリストテレスも共同体における音楽教育の重要性を強調し、中世の大学では音楽が自由七科の一角を占めていました。しかし今日、音楽は日本の公的教育においてそれほど重きをなしているようには見えません。

日本の大学における専門的な音楽教育は実践的スキルに特化する傾向があるため、総合大学から切り離されがちです。単科大学としての音大のみならず「日本で唯一の国立総合芸術大学」を謳う東京藝術大学の音楽学部もまた、フランスのコンセルヴァトワール（音楽院）のように、メチエと直結した実技教育を重視しています。

それに比べ、「非実技系」の総合大学における音

楽の専門教育は、職業音楽家の育成を目指しているわけではありません。しかし、音楽研究の場として見た場合、総合大学はいわゆる「音大」や「芸大」にはない可能性を蔵しています。後発の学術領域である音楽学は、テキスト批評や文学理論、美術史、人類学、記号学、パフォーマンス研究、楽器学、音響学など様々な学問領域の方法論を援用しながら発展してきました。そうした性質上、音楽や音響に関わるあらゆる領域と接点を持ち得ます。その意味で、総人・人環という「知のジャングル」に音楽学が位置づけられたことの意味は、決して小さくないと思います。

目下必要を感じているのは、音楽教育環境の整備です。具体的には、音楽テキスト解釈の基礎となるソルフェージュ、楽典、和声学の授業に加え、気兼ねなく音を出せる防音教室です（それらの設備は他芸術分野の研究者や学生も広く活用できるでしょう）。こうした環境の整備は、実践と理論とが連携した教育・研究を推進する第一歩となるでしょう。

ところで、京大と音楽はこれまで長い歴史を紡いできました。1925年に今日の「音楽学」に相当する博士号を日本で最初に取得したのは京都大学の兼常清佐（1885～1957）です。京都大学音楽部交響楽団の創立は更に古く1916年に遡り、京都大学音楽研究会（1950年創立）の直接の前身にあたる「三高音楽部」の創立は1945年頃に遡ります。この春は、音楽研究会器楽部の部室からベートーヴェン、リスト、ショパン、アルカンなどのピアノ曲が漏れ聞こえてきました。とはいえ、吉田南グラウンドの彼方で鳴り響くそれらの音は「課外の音」です。豊かな音楽的ポテンシャルを有する京大で音楽が教育課程の一角を占めるとき、音楽知は総人・人環を中心として隣接諸分野の学生や研究者と共有され、新たな地平を拓くことに貢献できると信じています。

(うえだ やすし)

新任の先生方より

「真面目な勉強」ではなく「誠実な学問」を

須藤 秀平

(人間・環境学研究科 共生人間学専攻/
総合人間学部 人間科学系)



2022年4月に着任しました。専門は近代ドイツ文学です。修士課程から大学院人間・環境学研究科で学び、その後ドイツ語の非常勤講師としても働いたので、吉田南にはこれまで計10年間ほど出入りしたことになり

ます。とはいえ、昨年度までの3年間は福岡大学に勤務していましたので、着任時には京大の空気にはいくぶん久しぶりの感触がありました。

数多くの大学を知っているわけではありませんが、それでも京大の空気はやはり独特です。有り体に言えば、「世間」や「普通」といったものからの隔絶感でしょうか。そしてそうした傾向は、特に総人・人環に強いように思います。それはおそらく、総人が「自由の学風」を謳った旧制三高の直系であり（知らない人は調べること!）、「教養」の伝統を受け継いでいるからでしょう。「教養とは何か」をここで過不足なく表現するのは困難ですが、あえてその特徴を一つ挙げるなら、「良い意味で専門化されていない」ということです。

このことはもちろん、総人・人環に専門性がないうことではありません。言うまでもなく、ここには各分野で優れた専門的研究をされている先生方が集まっています。その一方で、多種多様な専門分野の研究者が構成する総人・人環という場は、研究によって得られる専門的知見が、さらにどのような意義を持つのかという問いを絶えず促します。私自身、専門とするのは18-19世紀のドイツ文学ですが、その中で論じるのは例えば当時のナショナリズムや、ジャーナリズムと世論といった、現代社会とも無縁ではない問題です。こうした視座は、私自身が総人・人環で学んだことによって培ったものです。

かつて私が学んだゼミには、ドイツ文学に限らず、哲学や政治思想、さらには経済史学やユダヤ文化など、様々な分野の学生たちが所属していました。そうした学生たちと先生とが一堂に会して、自分の研究で何がわかったのか、何がわからないのか、そもそも何が問題なのかといった本質的な問いをめぐって毎週のように熱い議論を戦わせました。こうしたゼミの雰囲気、退官された私の先生は「いまどき珍しくも古風な〈学問する場〉」と表現しました。これは近年しばしば「学際的」として求められるようなものとも異なります。

これに関連して私が最近よく考えるのは、「真面目」と「誠実」という二つの言葉です。これらは似ているようで同質ではありません。例えば、「真面目に授業に出る」という言い方はあっても、「誠実に授業に出る」という言い方には違和感があります。どうやら「真面目」という言葉には「外見上の態度がきちんとしている」という意味が込められているようです。この意味で「真面目」は短絡的な有用性と結びつきやすいとも言えます。それに対して「誠実」という言葉は、もっと高次の目的に向けられるべきもののようです。「真面目に研究業績を増やす」とは言えても、「誠実に研究業績を増やす」では合わないからです。もちろん、「誠実に研究する」ことは可能です。

世間的に見て「真面目」でなくともかまわない。自分が信じる規範や価値観に実直であることを通じて、本当の意味で社会に「誠実」に向き合うことができる、そんな人間を——「人材」ではなく「人間」を——育みたい。そのために、「真面目に勉強する」のではなく「誠実に学問する」場を提供したい。これが教員として総人・人環に帰ってきた私の願いです。

(すとう しゅうへい)

新任の先生方より

「古巣」に戻って



2021年4月に着任して、早くも1年半以上の時が経ちました。想像していた以上の自由を感じつつ、同時に仕事も想像していた以上に多く、苦労もありますが、なんとか新しい状況に慣れてきたところです。

北海道出身で、北海道大学の文学部を卒業しました。自由な空気を求めて人間・環境学研究科に進んで以来、2005年から博士論文を提出する2013年まで京都大学で長い大学院生活を送りました。大学院では、ヴァルター・ベンヤミンというドイツのユダヤ系思想家の思考形成過程を辿り、彼が文芸批評家として政治的姿勢を表明するに至るプロセスの研究をしていました。長い院生生活は悪戦苦闘の期間ではあったのですが、指導教員だった道籙泰三先生の厳しくも暖かい指導や、同じ研究室の仲間たちと過ごした思い出もあり、京大は懐かしい「古巣」のような場所と感じています。その「古巣」に戻って来られて、率直に言って大変嬉しいです。

人文系の学問の扉を叩いた院生として自分が人間・環境学研究科に感じていた魅力は、ディシプリンにとらわれずに思考できる自由と、隣接分野、異分野の学生、教員が身近にいることの刺激にありました。自分は、哲学や思想史、また経済思想などにも興味を持ちながら、主にドイツ文学の領域で研究を進めましたが、自分の興味を押し殺すことなく研究を進められたのは、研究の対象としているベンヤミンという思想家が領域横断的に思考した人だったこともありますが、多様な人がそれぞれの関心で研究を進めている「人・環」という場にいたからだとあらためて思います。

小林 哲也

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻/
総合人間学部 国際文明学系)

ベンヤミンが、文学、美学、哲学、社会学、人類学など様々な領域で参照されていることもあり、私自身も文学・精神史という自身の研究領域は大事にしつつも、関心を広げながら研究を進めています。最近、ベンヤミンのメシアニズムの「ユダヤ性」を探るうちに、彼に思考のモチーフを提供していた友人ゲルショム・ショーレムの思想にも関心を深めています。この新しい関心をこれまでの研究にどう接続させられるのかを模索中です。さらにマルティン・ブーバー、エルンスト・ブロッホ、ジェルジ・ルカーチなど同時代のユダヤ系知識人の布置の中でのベンヤミンとショーレムの位置づけを明確にする研究も進めたいと思っており、また、これと関連して、19世紀からのドイツ語圏のユダヤ人の「同化」をめぐる諸問題についても検討を進めているところです。

総合人間学部の学生は多様な関心を持っているように思います。講義やゼミは、メシアニズムと黙示録の関係、ユダヤ・キリスト教的救済史と歴史哲学との関係を検討していますが、予想もしなかった視点からの反応がかえってくることも多く、こちらにも刺激を与えられています。院生の指導も始めていますが、文献読解の方法や文学思想研究の蓄積を伝達していくと同時に、多くの議論を交わして、お互いに視野を広げられるような関係を築いていきたいと思っています。

教員として着任してからは、ドイツ語教員や外国語関係、同じ分野の人文系、社会科学系の先生と接する機会が多いですが、『総人・人環フォーラム』の編集に関わる過程で、理系の先生ともお話しをする機会が得られて、発想の違いに新鮮な驚きを覚え刺激になっています。「越境」的思考のためのヒントを得やすい環境を活かし、研究と教育に励んでいきたいと思っています。

(こばやし てつや)

新任の先生方より

馴染み深いものと、見知らぬ横顔と

津守 陽

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻/
総合人間学部 文化環境学系)



2022年4月に人間・環境学研究科に着任いたしました。この春までは神戸市外国語大学に10年ほど勤めておりまして、また以前は東京大学でも一時期研究員などをしていたのですが、それを除けば、学部入学以来の時

間は基本的に京都大学文学部の中国語学中国文学専攻で過ごしてまいりました。ですので、今年から新たに吉田南キャンパスへ通勤し始めた際には、百万遍や東一条界隈の景色に格別の馴染み深さを覚えずにはられませんでした。とはいえこの感慨の中には、二年ぶりの対面授業再開による一抹の興奮も混じっていたように思います。

私自身本来は一人の時間が好きなたちで、家にもって作業するのも苦にならないタイプなのですが、そんな自分にとってすら、コロナ禍とそれに伴うオンライン授業が続く二年の日々は、非対面コミュニケーションの限界に気付かされる機会となりました。学会のハイブリッド開催や、Webシステムを通じた学生とのやり取りなど、コロナ後に普及した新しい手段の利便性は高く、今後も継続するものと思われれます。それでも昔ながらの対面による対話の場で得る有形無形の刺激は得難いもので、二年の中断を経て再開された対面の授業や研究会は、あらためて「今日の対話で何が生み出されたのか」と自身に問い直す、小さくとも発見に満ちた日々の契機となりつつあるように感じています。馴染み深いキャンパスへ、そのような小さな驚きとともに足を踏み入れる機会をいただいたことを、大変嬉しく思っております。

馴染み深いと思っていた相手の中に、ふとした瞬間に見知らぬ横顔を見出す驚きと喜びは、専門とする近現代中国文学の研究において、普段から私自身それを得ようと心がけ、目指しているところ

でもあります。私の専門はおおよそ辛亥革命以後の中国語圏の文学で、なかでも中華民国期に活躍した沈從文(1902-88)という作家を中心に研究を進めてきました。沈從文という作家はかつて中華人民共和国成立前後の時期に強い政治批判を浴びたため、数十年にわたって文学史からは忘れられた存在でしたが、1980年代に再評価が進み、現在では近代中国を代表する作家の一人とされています。大学院生の頃以来、もう20年も彼の作品と付き合ってきたので、さすがにそろそろこれまでの研究を書籍にまとめようとしているところですが、そもそもなぜそんなに長い間飽きもせず研究対象としてきたのかというと、彼の作品がいつもふとした細部に不可解な横顔を垣間見せ、それを理解しようと糸を辿っていくうちに、近代中国の興味深い思潮や概念の系譜に行き当たる、という経験を何度もしてきたからです。

例えば彼は自身の故郷であり、少数民族と漢族の混住地域でもある中国辺境の湘西地方を繰り返し小説で描いてきましたが、繰り返し故郷の村を描くという行為自体、地方農村が「失われゆく古き中国」として近代知識人の心に像を結んでゆく、〈郷土中国〉像の形成を背景とするものです。また沈從文の湘西物語で際立つのは純朴な田舎娘たちの形象ですが、少女たちに寄せる作家のフェティシスティックな眼差しの変遷を追うと、都市のモダンガールの短髪に触発された欲望を盛り込むことで、はじめて魅力的な辺境中国の表象が成立したのだという逆説的な経過が見えてきます。こうした読み解きの試みを積み重ねていく中で、近現代の中国語圏におけるナショナリズムやジェンダーに関する自身の考えが更新され、ひいては日本を含む東アジアの近代についても、わかったつもりだった事象の別の顔が見えてくる。そんな営為としての研究と教育を、新しい職場でも続けていきたいと考えております。

(つもり あき)

新任の先生方より

着任のご挨拶



4月に共生文明学専攻、歴史文化社会論講座に准教授として着任しました福谷彬と申します。中国哲学史、特に南宋の朱子学を研究しています。

私は生まれは東京ですが、小学生の時に親の転勤のため京都へ移り住みました。2006年に京都大学文学部に入学して以来、修士・博士課程も文学研究科で過ごし、高級進修生として北京大学哲学系へ一年の留学をはさんで、2018年に博士学位（文学）を取得し、同年度に京都大学人文科学研究所の助教に採用されました。本年度からは人間・環境学研究科で採用して頂きましたので、学部入学以来現在に至るまでずっと京都大学にお世話になっていることとなります。

私の専門は、中国哲学史ですが、単なる思想や文献学ではなく、政治や社会とのつながりに注目して研究しています。官僚士大夫が活躍した宋代という時代には、「朋党」と呼ばれる政治的見解を共有する集団が複数形成され、政治の主導権をめぐってしばしば朝廷で争いました。宋代において特筆すべきことは、こうした朋党がそれまでの時代のような地縁・血縁に基づいて結束したというだけでなく、政治理念による結束という面が強かったことです。宋代というと新法党と旧法党の対立が有名ですが、これと同様の党争が宋代を通じて絶えず繰り返されました。ある意味では、現代の議会政治における与党と野党における政策論議にも似た様相が今から千年も昔に見えていたのです。もっとも、それはよりよい政策へと互い

福谷 彬

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻/
総合人間学部 国際文明学系)

に切磋琢磨するような美しい面ばかりではありません。

よこしまな権力者による自身に迎合的な側近の登用、そうした登用された側近による賄賂人事や汚職、批判的な者を排除するための学校制度・科挙試験改革や、人事を通じた官僚の統制。下級官吏の側も保身のための権力者へ付度し、次第に耳の痛い報告を避けるようになり、権力者もそれを歓迎する…。対立する朋党に権力を奪われることを恐れ、このような状況が生じてしまったこともまた宋代政治の無視できない一側面でした。

私は宋代の政治を研究する中で、このような宋代の朝廷をめぐる様々な問題が、現代の日本社会の様相と非常に重なっているように見えてなりません。それは、宋代中国と現代日本がともに「言論」に基づく政治ということ在建前とする社会である点で共通している面があるからだと思います。上に述べたような宋代政治の構造的な問題にいち早く気が付いたのが、宋代の朱熹や陸九淵などの「道学者」と呼ばれる思想家たちでした。私は、彼ら道学者が様々な社会問題に取り組んだ姿勢には、混迷する現代にこそ大いに学ぶべき価値があると感じています。

総合人間学部および人間・環境学研究科で学ぶ学生の皆さんには、文献を正確に読む力を養ってほしいのはもちろんのことですが、現代社会の様々な事柄への関心のアンテナを持つことを大事にして欲しいと思います。そうした関心を持つことは研究の価値をより深いものにしますし、やがては研究を通じて、実社会に貢献するための視座を獲得することにもつながると思います。

(ふくたに あきら)

新任の先生方より

水は方円の器に随う

高見 剛

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻)



2019年10月9日、衝撃が走りました。この日は、ノーベル化学賞の発表でした。リチウムイオン電池で成果をあげた3人が選ばれました。そのうちの一人が、テキサス

大学オースティン校のグッドイナッフ教授です。2007年に同教授に連絡し、学位取得からの1年間テキサス大学で一緒に研究しました。ここ、テキサス大学にてリチウムイオン電池や固体酸化物燃料電池に関する研究を開始し、これが京都大学で現在の研究を行うきっかけになりました。

グッドイナッフ研究室では、朝早くから夜まで研究に切磋琢磨する仲間にも恵まれました。また、同教授の部屋の前には学生さんの長蛇の列ができ、質問や議論が活発に行なわれていました。このような光景は日本の研究室ではあまり見受けられず、良い刺激になりました。また、研究指導では日々熱心な議論が行われます。論文の原稿に対しては、教授自らが添削してくださいました。驚くべきことに、どんなに忙しくても3日以内には必ず返却されます。この原稿は自身の宝物でもあります。米国から持ち帰っており、今でも見返すことがあります。

京都大学では、電池材料を対象として、「新しい物質に機能を宿す」との志のもと研究を行っています。その過程では、ものすごく真剣なことと同時に、楽しくワクワクするくらい遊び心を持つことも大切です。学生さんには「想像しましょう、

他の人とは違ったユニークなこと、例えば世界初の物質を社会に役立たせることを」と話しています。好き嫌い、向き不向きで悩むよりも、飛び込んでみれば、新しい世界が拓けます。きっかけさえつかめば、実力は後から必ずついてきます。

具体的には、どのような元素をどのように構造へ組み上げるかが、機能に直結します。フッ素、酸素などの陰イオンを含んだ構造をデザインし、合成します。中でもフッ化物イオンを動かすことにより、優れた電池性能の達成を目指しています。機能解明には、量子ビーム（放射光、中性子）を用いた最先端の計測・解析技術を使用しています。蓄電池分野で『モノ（物質）』と『コト（機序・機能）』を先導し、人類が直面しているエネルギー・環境問題に取り組んでいます。2019年4月から日本セラミックス協会秋季シンポジウムのオーガナイザー、同協会の年会ではエネルギー関連材料セッションの座長を務め、蓄電池分野の学術的発展のために活動しています。

吉田南構内には野球のグラウンドがあります。私は大の野球好きで、阪神ファンです。硬式野球部が練習している様子を楽しみに付近を歩くこともあります。かつて、野茂投手がメジャーで一時代を築きました。近年では、イチロー選手がメジャー年間最多安打記録を更新しました。最近では、大谷選手が15勝をあげ、30本以上のホームランを打ちました。まさに投手と打者の二刀流です。私もモノ（物質）とコト（機序・機能）の二刀流を強みにして、研究に邁進したいと思います。

(たかみ つよし)

故 那須耕介 教授 追悼



在りし日の那須耕介先生
 第2回京大変人講座『安心・安全が人類を減ぼす』でのひとこま
 日時：2017年6月2日（金）18:30～20:00
 場所：人間・環境学研究科地下講義室
 主催：アートサイエンスフォーラム, 変人講座実行委員会
 協賛：学際融合教育研究推進センター, 関西 TLO, 京大生協
 協力：学術研究支援室

悔いにまみれた年長の後輩より

細見 和之

(人間・環境学研究科 共生文明学専攻/
 総合人間学部 国際文明学系)

2021年9月7日、那須耕介さんが亡くなられた。以前から厳しい闘病のことはうかがっていたが、あまりに早く届いた訃報だった。1967年11月14日、京都市に生まれた那須さんは、京都大学法学部を卒業後、2001年に京都大学大学院法学研究科博士課程を修了。摂南大学助教授を経て、2012年9月に京都大学人間・環境学研究科に准教授として着任され、2018年4月に教授に昇任された。主な著書に『法の支配と憲法義務』（勁草書房、2020年）があるが、享年52というのはあまりに惜しい。

私が那須さんの訃報に接したのは、大学院入試の1日目の最中だった。2日目には受験者に対する面接が控えている。研究科の同じ講座、同じ分野に属していた私は、那須さんを第一志望の指導教員として受験している学生に、那須さんの死去を告げねばならなかった。そのとき、受験者と私のあいだに、お互いに呆然としているような時間が流れた。

それにしても、那須さんと同じ講座、同じ分野に属しながら、那須さんのことを私はよく理解できていなかった。2017年に准教授から教授へ那須さんが昇任される際に、その業績を確認していて、那須さんが鶴見俊輔さんらの「思想の科学」のいちばん若いメンバーのひとりであることをようやく知ったぐらいだ。それに那須さんが日本で数少ないアイザー・バーリンの専門的研究者のひとりであること、さらに、文学にもとても造詣が深いことなど。

私は那須さんより5歳年上だが、私が人間・環境学研究科に着任したのは、那須さんより3年半ほどあとである。こうなると関係が若干ねじれる。自分の年齢が上でも私にとって那須さんは職場での先輩のような感じでもあった。たとえばアーレントについて那須さんが批判的な語り方をしても、もう一步踏み込んで訊くことができなかった。「思想の科学」には、私と同年配の作家・黒川創さんもいて、那須さんと3人、京都の居酒屋で、思想について、文学について、尽きせぬ話が何度も交わせたはずなのだ。

那須さんが亡くなってしばらくして、ご自宅を訪問して奥様とお話しした際、那須さんが残した膨大なレコードとCDを見せていただいた。那須さんが音楽の話をするのをすこし耳にしたことがあったが、どうやら那須さんの音楽への入れ込みは相当なものだったようだ。ほかにも学生時代からやられていたらしい狂言……。私自身じつに下手くそな歌とギターでときおりライブを試みている身であり、私の娘二人は狂言を本格的にやっていたのだ。

私が年長者として那須さんにできたのは教授昇任の際にすこし関わったことぐらいだが、それとていまでは那須さんの体に大きな負担を強いただけではなかったかと悔やまれる。どうやら私は、悔いにまみれた年長の後輩という不格好な位置から抜け出られそうにない。

那須さん、変な年長の後輩にあなたも閉口していたかもしれませんね。しばらく鎌倉で暮らしていた黒川さんが先日京都に戻ってきましたよ。せめて黒川さんから那須さんについての四方山話、居酒屋でたっぷりきかせてもらうことにしますね。

(ほそみ かずゆき)

すべての法律は守れません！

酒井 敏

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻/
総合人間学部 自然科学系)

これは、法哲学者の那須耕介さんの言葉です。この予想外の言葉にビックリして、具体的に彼が何といったのか、はっきり覚えていませんが、彼の説明はだいたい次のようなものでした。「法律とは、その場その場で必要に応じて作られた約束事の集合体です。すべての法律を把握している人は誰もいないので、それぞれの法律がお互いに矛盾しているということは日常茶飯事です。だから、法律は守ればよいというものではなく、また、すべての法律を同時に守ることは不可能です」それでは、どうすればいいかという「法律には、それらが作られた背景や趣旨があります。2つの法律が矛盾している場合、それぞれの法律が作られた背景、趣旨を考慮して、状況に応じて、どちらの法律を適用すべきが判断しなければならぬのです」

言われてみれば、その通りなのですが、法学者は「法律は絶対に守らなければならない」と言うに決まっていると思い込んでいた私としては、目から鱗というか、晴天の霹靂というか、とにかくビックリ仰天という以外にはありませんでした。

一方で、地球科学を専門とする私としては、実に共感できる話でもありました。今の地球環境を維持する仕組みをすべて理解している人など、どこにもいません。様々な予測モデルはありますが、それは、人間のわずかな経験にもとづいて、自然界のごく一部を切り取ったものにすぎません。そもそも、初期の地球生命にとって酸素は毒だったわけで、その毒だらけになった現在の地球で「正しい地球環境」などというものを定義する理屈はどこにもありません。当然、私は二酸化炭素をまるで悪者のようにいう環境保護派には違和感を感じるのですが、このご時世、下手なことを言えば、お前は温暖化懐疑派か、と袋叩きにあいます。

さらに専門にかかわらず、我々大学教員は若い学生に講義をして、彼らの「評価」をしているわけですが、その評価は我々旧世代の評価です。彼らは将来、未知の問題に対処しなければならないのですが、その問題も解決法も今は誰も知りません。したがって、今の「評価」にあまりこだわりすぎると、若者の将来に良い結果をも

たらさないのではないかと思います。

もちろん「法律なんか守らなくてもいい」という意味でもなく「二酸化炭素はどんどん排出してもいい」という意味でもありません。また、大学の成績は意味がないと言っているわけでもありません。哲学者の戸田山和久さんの言葉を借りれば、正しさや正義などというものは「ありそで、なさそで、やっぱりあるもの」なのだと思います。ただ、人間社会や自然の生態系などは、最初から「こうすべき」という設計図があるわけではなく、すべては成り行きで、うまくいったものが残っていく。正しさや正義は後付けの理屈で、時代や状況が変われば当然変化します。だから、表面的で形式的な正しさに依存するのは危険で、背景などを含めたそもそも論から常に考えなおす必要があるわけです。

こういうあいまいで言葉にしにくいことを、法学の立場からはっきり言ってくれる那須さんは、とても心強い存在でした。そして、表面的な「正しさ」を振りかざす「正義マン」がはびこる世の中で、京大がこういうことを言えなくなってしまったら、誰も言えなくなってしまわないか、という危機感ももっていました。その那須さんの訃報に接して、私は悔しくて涙が止まりませんでした。那須さんもまだ言い足りなかったことがたくさんあったに違いありません。

京大もご多分に漏れず、形式的な正しさを求める世の中の流れに抗しきれていないようにも見えます。しかし、もともと「生態系」として成立していた京大の文化はそう簡単には絶滅しないと私は思っています。那須さんのDNAは京大のどこかに、というより、そこかしこに潜んでいて、復活の時を虎視眈々と狙っているに違いないと信じています。

(さかい さとし)

那須先生を偲ぶ

小畑 史子

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻/
総合人間学部 国際文明学系)

那須耕介先生はご夫婦の会話の中で「私たちの娘に将来どんな人になってほしい？」と尋ねられ、「その場にいる人の中で最も弱い人のことを考えられる人になってほしい。」とお答えになったそうである。那須先生のご葬儀の喪主のご挨拶の際にそのことをうかがい、那須先生のお人柄を端的に示すエピソードであると感動し、同時に、そのような那須先生がもうこの世にいらっしゃらない現実がたまらなく辛くなった。今もそれを思う度に辛く苦しくなるが、那須先生の教えを大切に、それを学生達に伝えていく使命を果たさなければならないと思うことで辛さを紛らわしている。

那須先生がどれほど多くの方々を救ってこられたか、幸いなことに私は少々存じ上げている。総合人間学部、人間・環境学研究科では、私も含め多くの同僚が、那須先生とお仕事で一緒する中で助けられ、またそのお人柄に触れ、感銘を受けてきた。学生達も例外なく、那須先生をお慕いし、那須先生の授業やゼミに出席してご教示を賜ること、御著書や御論考を拝読することを楽しみにしていた。

那須先生に心を救われた人は、総合人間学部、人間・環境学研究科の中にとどまらない。

2019年初秋に、他研究科で教授をしている知人のK先生から、「那須先生と交流はありますか？京大変人講座の那須先生の文章を拝読して、是非お話しさせていただきたいと思っているのですが。」と相談を受けた。K先生は、災害からの復興工事に協力されていて、「法の観点からはどのようにとらえられるのか。」と考え込むことが多いと話し、那須先生のお話を、学生達や関係者とともに拝聴したいと希望されていた。お加減の優れないご様子の那須先生のご負担になるのではないかと迷いつつ那須先生にその旨をお伝えすると、K先生に那須先生のメールアドレスをお伝えすることをすぐにご快諾くださり、那須先生とK先生との交流が始まった。

数ヶ月後に、K先生は、学生達を連れて、福島の実地視察に赴き、帰学直後に、学生達および福島で苦労されているご関係の方々とともに視察を振り返りつつ那須先生のご講演を拝聴したそうである。那須先生のご講

演は示唆に満ちていて、多数質問も出て、それらに対する那須先生のお答えに、全員が感動し、福島で大変な苦労をされている方々も「救われる気持ちでいっぱいです。」と感激して帰られたとのことであった。K先生のメールは「我々のこの感銘を、私の至らぬ能力ではこれ以上お伝えできないのをとてももどかしく思っています。」と結ばれていた。那須先生に、K先生からの感謝をお伝えしたところ、那須先生は少し照れたようなお顔をされ、「K先生に大変よくしていただいて、学生さん達にもいい質問をたくさんしていただいて助けられました。K先生を紹介していただけたおかげです。」とおっしゃった。

那須先生のご講演に救われた福島の方々は、今も那須先生との時間を宝にして、奮闘されていることだろう。ご講演を聴いた学生達も、那須先生のお話によって芽吹いた思いを胸に巣立ち、成長を続けていることだろう。那須先生のような素晴らしい方がこの世に存在して下さったことで、どれだけ多くの方々「救われる気持ち」になったことだろうか。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

(おばた ふみこ)

那須さんのこと

佐野 亘

(人間・環境学研究科 相関環境学専攻/
総合人間学部 国際文明学系)

18才で京大に入学して、右も左もわからないまま、どこのサークルに入ろうかと思ってフラフラしていたら、たまたま「民俗研究会きょうと」というサークルに入ることになりました。たしか生協の食堂で説明会があったような気がします。そこには現在同僚の倉石先生などがおられたのですが、那須さんもいました。さらにその後、大学院に進学してみると指導教員のゼミに那須さんが参加されていました。大学教員として就職してからも、那須さんとは、科研のプロジェクトや書籍の出版など、さまざまな場面でお付き合いすることが続きました。そして最終的には人間・環境学研究科で同僚になったわけで、30年にわたって近いところに居たことになります。

というわけで、思い出は数多く、たださびしいばかりで、正直なところなにを書いていいかわかりません。ただ、「総人・人環広報」ですし、せっかくなので、総人・人環にまつわることを書こうと思います。

同僚になってからの那須さんについていうと、もっとも印象的なことは、その教育熱心さでした。前任校でのことも含めてエピソードはいろいろあるのですが、わたしがいちばん驚いたのは、他の研究室（じつはわたしの）の院生にもきちんと指導をされたことです。

自分の恥をさらすようで身が縮む思いですが、わたしが指導する修士課程にはிரいたての学生が、那須さんの演習に出たところ、英語の講読についてこれず、じゅうぶんなレジュメをつくることもできない、ということで、わたしのところにいていねいなメールをいただいたことがあります。「このままでは心配で、もし当該学生が本気で研究を続けたいのであれば、指導をしたほうがいいと思う。よければわたしのほうで一度呼び出して話をするが、よいか」という趣旨でした。わたしとしては、恥ずかしいやらありがたいやらで、どうぞよろしくお願ひします……ということで、お返事しました。またこれとは別の学生ですが、授業後に那須さんに研究室に呼び出されて、同じようにゼミでの発表のことで厳しく（とはいえもちろんいねいな）指導を受け、本人曰く「うちにかえって（自分の不甲斐なさに）泣いた」ということでした。さいわいなことに那須さんの個別指導を受けた学生はいずれも、研究に対してそれまで以上に熱心に取り組んでくれたように思います。

このとき、なによりわたしが胸を打たれたのは、那須さんの教育への真剣な態度というか、学生に対する真摯さ（責任感とやさしさ）でした。わたし自身はけっこう甘い（自分に対しても）というかテキトーで、「できないならできないなりになんとかなるだろう」くらいに考えがちで、しかも他の研究室の学生に対してなにか言おうという気持ちになったことはありませんでした（いまでもなかなかできません）。那須さんは基本的に「ひとそれぞれ好きにしてください」というタイプで、口うるさいひとではないのですが、「ゆるがせにできない大事なこと」については必ずきちんと筋を通すひとでした。そういう那須さんの「がんこさ」に、わたしは何度か背筋を伸ばす気持ちにさせられたものですが、今回もまた大事なことを教えられた……と思ったものでした。こういう「がんこさ」がいまの総人・人環はもちろん京大にも求められていると思うのですが、それ以上に、わたし

自身にとって鑑のような存在が身近にいなくなってしまうことがとにかくさびしいばかりです。

（さの わたる）

那須耕介先生を偲んで

見平 典

（人間・環境学研究科 共生文明学専攻／
総合人間学部 国際文明学系）

那須耕介先生は、2012年に人間・環境学研究科および総合人間学部に、法哲学・法思想担当教員として着任されました。以来、那須先生とは同じ法学担当教員として、教育をはじめ様々な場面において、ご一緒させて頂きました。ここでは、そのような立場から、敬愛する那須先生の教育者としてのお姿をご紹介します。

那須先生のご講義（総合人間学部「国家・社会法システム論 IA・IB」）には、特筆すべき特徴がありました。1つは、毎年新しくテーマを設定されていたことです。那須先生は、「遵法責務論」、「開発と法」、「表現の自由」、「法多元主義」、「リバタリアン・パターンリズム」、「移行期正義と開発理論」等、毎年ご講義のテーマを変えておられました。演習形式の授業では、テーマを毎年変えることは珍しくありませんが、講義形式の授業では、前年の授業内容を部分的に更新していくことが一般的かと思ひます（私もその1人です）。その更新作業ですら多大な労力を必要とし、私の場合毎年なんとかやりくりして辛うじて間に合わせている状況ではありますが、那須先生は毎年全面的に新しい内容の講義を行っておられたのです。しかも、そのテーマは、いずれも日本社会・国際社会において今まさに考えられるべき問題、重要性を増しつつある問題を踏まえたものでした。いずれも社会の動向に対する那須先生の鋭いご洞察と問題意識を反映したものであり、私にとって毎年4月に那須先生の新しいシラバスを拝見することは楽しみでもとともに、刺激を受け、学ばせて頂く機会でもありました。

今1つは、自らの知的探求・知的格闘のお姿を、ご講義の中で示しておられたことです。那須先生が設定されるテーマは、先生にとっても新しいチャレンジなテーマであったと伺っております。那須先生は自らそれに取り組み、「課題の発見と解決」「試行錯誤と模索」の

過程を学生に見せることにより、学問的営為とは何か、自らのお姿を通して示しておられました。那須先生が毎年新しくテーマを設定されていたのも、このためであると理解しております。

このような那須先生の講義スタイルは、教育に対する強い情熱と卓越した力がなければ実現しえないものです。私はこの講義スタイルを初めて伺ったとき、私には到底なしえないと衝撃を受けるとともに深い感銘を覚えたことを、今でもはっきりと覚えております。那須先生のご講義は、まさに大学教育の目指すべきものを体現しておられました。私は未だその地点にははるかに遠いところにおりますが、いつの日かは那須先生のような講義を自ら行うことができますように、研鑽を重ねて参る所存です。

紙幅の関係からこれ以上ご紹介することはできませんが、那須先生は、学生にも私のような若手教員にも常に、那須先生に直接お会いしたことのある方であれば皆ご存じの、あの周りを包み込むような温かな笑顔でお導き下さいました。難しい局面において、那須先生に救って頂いたことは一度ならずありました。心からの感謝の思いを胸に、那須先生が安らかにお眠りになりますことを、謹んでお祈り申し上げます。

(本稿は、那須耕介さん追悼文集編集委員会編『那須耕介さんの「ま、そんなもんやで」——那須耕介さん追悼文集』に寄稿した内容に、一部加筆したものです。同追悼文集においてご紹介致しました、大学教育に対する那須先生のお姿を、本研究科・本学部関係者の皆様とも共有させて頂きたく、本誌にも掲載して頂きました。)

(みひら つかさ)

果たせなかった「那須デビュー」 ——2019年秋・「未来形」シンポ の断想

倉石 一郎

(人間・環境学研究科 共生人間学専攻/
総合人間学部 人間科学系)

那須さんから受け取った Word 文書のファイルが今もパソコンに眠っている。「コメント(那須)」と題された、2019年10月8日付のファイルである。総字数3000字弱で、標題は「誰の失敗? どんな成功? ——ラバリー教授の『教育依存社会アメリカ』へのコメント(要旨)」となっている。力が入った那須さんの生原稿を世界で一番はやく読める「眼福」に浴した私だったが、今となっては喪失感しかわいてこない。

前年、小林美文氏との共訳でデイヴィッド・ラバリー先生の著書“Someone has to fail”を刊行した私は、訳書出版にちなんで著者を日本にお呼びしイベントを打ちたいと画策していた。いくつかの空振りののち、本学の「人文社会の未来形」プロジェクトの資金を得て招聘の目途が立った。シンポジウムには、学内の複数教員が必ず参加するという条件である。京大でのシンポ日程も11月27日と決まり、登壇者の顔ぶれを考える段になったとき、私の頭にまず浮かんだのが那須さんの顔だった。

那須さんは座談やシンポジウムの名手だ。深い学識、軽妙な語り口は言うまでもないが、踏んでる場数がちがう。京大に入学直後の1987年から、鶴見俊輔氏を中心に雑誌『思想の科学』などの周辺に結集した人びとの輪の中で那須さんは活動を開始した。1年後に入学した私は、那須さんが同期の友人らとつくった「民俗研究会きょうと」というサークルの末席で、そのまばゆいばかりの活躍ぶりを目にした。ただただ驚くばかりだった。同じ人間と思えなかった。その時からずいぶん時間が経っていたが、YouTubeにアップされている「京大おもしろトーク」の動画を拝見しても、名手ぶりにますます磨きがかかっているのは明らかだった。那須さんと同じ席に並ぶ、しかも自分の企画で一私にとって長年のあわい夢だった「那須デビュー」を果たせる時がきた。雲の上の存在の那須さんに声をかけるのに若干の勇気が必要としたが、献本もしないのに『教育依存社会…』の短い好意的読後感を寄せてくれていたことが自分を後押

しました。ご快諾いただいた。やった、デビューの日は近いぞ。

その後、2019年初夏から秋にかけて、他の登壇予定者もまじえて数回打ち合わせをした。至福の時間だった。だがいま思いかえせば、いったん小康を得ていた那須さんの病状が再び悪化を始めた時期と、ちょうど準備期間が重なっていた。快諾と書いたが、実のところご自身の体調を慮りかなり躊躇されていたのではないかと。人環の同僚というより、民俗研のおぼこく頼りない後輩「倉石くん」の頼みだからと、不安を押し殺して参加に同意してくれたに違いない。那須さんは昔から変わらず、とことんやさしい方だった。

『教育依存社会アメリカ』（原題 Someone has to fail）はよい意味で「ゆるく書かれた」本で、多義的な内容を含んでいる。そのポイントの1つが、教育制度を通じた社会改革の企てがことごとく失敗に終わったという史実（事実）で、それがネチネチ蒸し返され矯めつ眇めつ考察が加えられている。しかし、10月8日付メールでいただいたコメント原稿の中で那須さんは言う。「この種の「失敗」は、すべて公教育システムを教育外の目的の達成手段として利用しようとする者が直面する「失敗」にすぎないのではないか」。そして次のように問いかける。「社会改革の企てがことごとく失敗に終わったことで、学校で教育を受ける当の生徒たち、学生たちはどんな不利益を被り、何に「失敗」したことになるのだろう。…生徒、学生たちが教育サービスを「消費」する際、学習の経験がそのような社会的価値のための活動—一種の「投資 investment」—としてのみとらえられているとは思えません。むしろ何の役にたつのかはわからないが、それ自体として愉快なものとして受け止められることが（稀でしかなかったとしても）あるのではないのでしょうか。」

ラバリー教授はなかなか豪快な人柄で、心のひろい寛容な方だ。この那須さんからの強烈なジャブを、どう受け止め、かわすのか、その応酬をぜひとも見てみたかった。ご本人は謙遜されていたが、那須さんはかなりの英語使いだったとも聞く。私には聞き取れない英語での直のものすごいやりとりが、交わされたかもしれない。それはかなわなかった。10月30日付で「お詫びとご相談」と題したメールが届き、肝臓転移など容易ならない状況となり当日の参加も厳しくなったと伝えられた。

全世界で、私を含めたほんの数名にしか共有されなかった原稿の中で、那須さんが強調した「何の役にたつ

のかはわからないが、それ自体として愉快なもの」。研究を含めたこの世における那須さんの活動もまた、何の役に立つかわからんがそれ自体愉快的な何かを、全力で追求し全力で楽しんだ、そんな営みだったのではないかと思う。総人環という場にもっともふさわしい、そんな存在がぬけた穴はあまりに大きい。

弾き手亡きギター板敷薪暖炉

座談の名手は天上 LIVE

2022年6月28日、同僚と那須先生のご自宅を訪ねた際の印象を詠んだ一首

（くらいし いちろう）

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第69号をお届け致します。
2021年9月7日に急逝された那須耕介先生とは、教授会や委員会の仕事などでお会いする以上の接点を持たずにおりました。今回、先生方から頂いた追悼文や倉石先生が紹介されている YouTube 動画を通じて那須先生の考え方、お人柄に触れること

ができ、数学という矛盾の存在しない世界を形作る論理について研究をしています私には、強く心を揺さぶられるものがありました。新任の先生方のご挨拶からは、研究の多様さだけでなく、様々なバックグラウンドからくる人間的な深み、そして、ここ総人・人環に向けた意気込みが伝わってきました。教授会や委員会ですらオンライン開催で、多くの先生とはお会いする機会が減ってしまいましたが、周りの方々への好奇心は失ってはならないと、改めて感じた次第です。

謹んで那須耕介先生の御冥福を心よりお祈りいたします。

(T. H.)

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会